

# 第1章 シロウオ漁の生活誌

川島 秀一  
(東北大学)

## はじめに

鶴見良行は、川の「上流と下流はどこで分かれるのか」という自らの問いに、英人考古学者ハリスンの、次のような見事な描写を紹介している。「潮の干満が途切れる線で区切る方法がある。海水と淡水を行き来するイラワジ・イルカを見かける限界も目印になる。海鳥も目やすだ。河にイルカが潜み空を海鳥が舞う。そこが海と大地の接する空間だ。嵐や洪水で大地を離れた流木が潮の干満で行きつ戻りつする状態を観察するのもいい。人間を観察する方法もある。河を上って行って魚を取る仕掛けがどこまであるかを見るのだ。漁師たちは、潮の干満と河の流れで微妙な動きをする海魚とエビをよく見きわめてやなを仕掛ける。だから、イルカ、海鳥、流木、やなのあるところ、そこが海と陸の境界だ」<sup>(1)</sup>。

本稿では、日本の河川において「海水と淡水を行き来する」、「潮の干満と河の流れで微妙な動きをする海魚」の典型として、シロウオを扱い、その漁の生活誌を描くことをねらいとしている。たとえば、熊本県天草市新和町の大宮地川では、シロウオが遡上して産卵する場所が、ぎりぎり汽水域だと語っている<sup>(2)</sup>。以下は、目で見ることのできる最小の魚と人間とが、どのように付き合ってきたのかということをテーマに、各地の事例報告を重ねながら考えていきたい。

## 1. シロウオ漁の種類

シロウオ（学名 *Leucopsarion petersii*）は、スズキ目ハゼ科に分類される魚で、一種のみでシロウオ属（*Leucopsarion*）を構成する。透明な体の小魚で、日本列島や朝鮮半島に分布し、食用に漁獲されるが、準絶滅危惧種の魚である。キュウリウオ目シラウオ科（*Salangidae*）に分類されるシラウオとは生態や姿が似ていて混同しやすいが、全く別の魚で、分布も異なる。シロウオの呼称は全国的であるが、日本海側ではイサザと呼ばれることが多い。

日本列島では、北海道の函館や青森県から九州南岸に至る、日本海、東シナ海、太平洋沿岸、瀬戸内海、有明海など、ほぼ全国的にシロウオは、おだやかな沿岸域で群れている。その生態は、甲殻類のプランクトンなどを餌としており、2月から5月にかけて、河川の伏流水のある、きれいな石と砂が混じるような下流域にきて産卵するが、寿命は1年で、産卵後に死亡する。この産卵のために海水から汽水域へ遡上してくるときが、シロウオ漁の季節になる。

漁には十字に組んだ竹2本で四角形の網を吊るした四手網<sup>よつであみ</sup>が全国的にもよく使われている。網を川底に吊るし、シロウオの群れが網の上を通過したときに一気に引き上げて漁獲するもので、早春の下流域で四手網を繰り出す様子は、各地で春の風物詩としてマスコミに取り上げられ、写真マニアの撮影の対象にされることも多い。他には、梁などでも漁獲されるが、築漁が行われる地域も、近世から伝わる福岡市の室見川下流をはじめとして全国に見られる。また、宮城県南三陸町歌津の伊里前川<sup>いさとまえ</sup>では、川に幾何学状に積み上げた「ザワ」と呼

ばれる石垣の隅に集めて捕獲する漁をしているが、これは新しく発達した漁法で、近隣地域に見られない。ただし、これらの沿岸部や河口域は、河川の乱開発から非常に捕れる量が少なくなっているのが現状である。

これらのシロウオ漁が現在でも行なわれている主なる河川と、その漁法などを一覧したのが表1である。シロウオ漁の漁法は、大きく「四手網」と「梁」に分かれるが、それぞれの漁法は区々であり、複合もしている。

たとえば、熊本県天草市の大宮地川のシロウオ漁では、梁垣によって導かれた先に四手網によって捕獲される(写真1)。青森県のシロウオ漁の例では、川の両側から梁垣を栈橋のように直線に張り出し、その先でシロウオを四手網ですくう漁法である。大分県佐伯市の番匠川でも梁垣と「せきすくい網」(三角形の袋網)を用いる。

以上のような事例を考えると、シロウオ漁で大きく2つに分けられる「四手網」と「梁」と呼ばれる漁法は一体に見えるが、シロウオに対して受動的な漁法が「梁」、積極的な漁法が「四手網」と捉えることもできる。

受動的な「梁」を用いる漁法では、川の流れにジクザグに梁を作り、V字型の先にシロウオを集め、そこでどのような漁法で捕獲するかは、地域によって相違がある。籠に入れるのが広島県の安浦での川漁や同県の三津大川、袋網になっているのが山口県防府市の佐波川や佐賀県唐津市の玉島川である。

一方の「四手網」だけを用いる漁法でも、ヤグラを作って固定して漁をするのは、湯浅の広川や徳島市の椿川、佐世保市の佐々川などで、一方で船を用いて漁場を変えながら四手網を下ろすのは、那智勝浦町下里の太田川や、萩市の松本川の例がある。ヤグラや船を用いず、四手網を岸から入れる鱈ヶ沢のシロウオ漁(写真2)や、海辺の波が打ち上がる場所に漁師が並んで立って四手網ですくう柏崎の鯨波海岸の事例もある。

本稿では、シロウオの受動的な漁法の「築型」の事例として、宮城県南三陸町歌津の伊里前川の「ザワ」と呼ばれるシロウオ漁と、積極的な漁法としての「四手網型」の事例として、和歌山県那智勝浦町の太田川のシロウオ漁を扱う。両地域共に、シロウオ漁の漁法の変遷をみるうえで特徴的なものであることが、対象にする理由である。適宜、表1にある他地域のシロウオ漁と比較しながら報告をしていきたい。



写真1 梁によって導かれたシロウオを四手網で捕る漁法  
(熊本県天草市の大宮地川、2017.3.8)



写真2 川岸から四手網を下ろす  
(青森県鱈ヶ沢町、2011.5.15)

## 2. 伊里前川のシロウオ漁

宮城県南三陸町歌津の伊里前には、小さな伊里前川が海にそそいでいる。この河口では、シロウオ漁が東日本大震災(2011年)前から続いており、震災の翌年には早くも再開している。

歌津のシロウオ漁のことを「ザワ漁」とも呼んでいる理由は、川石を並べるだけの簡便な漁であり、石のあいだからザワザワと水音がするからだという。明治時代から伊里前川を遡るシロウオを、ザルの中に青杉の葉っぱを敷いて捕っていたというが、カゴを始めたのは、昭和22年(1947)のころであったという。

表1 シロウオ漁が行なわれている主な河川

場所	河川名	シロウオの呼称	漁法
青森県青森市	野内川	シロウオ	四手網
青森県外ヶ浜町蟹田	蟹田川	シロウオ	梁
青森県鰯ヶ沢町	中村川	シロウオ	四手網
岩手県陸前高田市	気仙川	シロウオ	梁
宮城県南三陸町歌津	伊里前川	シロウオ	ザワ
新潟県佐渡市	国府川	シロウオ	四手網
新潟県柏崎市鯨波	(鯨波海岸)	イサザ	四手網
石川県穴水町	小又川	イサザ	四手網
京都府舞鶴市	由良川	イサザ	梁
福井県小浜市	南川	イサザ	袋網
三重県志摩市磯部町	磯部川	シロウオ	四手網
和歌山県那智勝浦町下里	太田川	シロウオ	四手網
和歌山県湯浅町	広川	シロウオ	四手網
徳島県阿南市椿町	椿川	ヒウオ	四手網
和歌山県宇和島市津島町	岩松川	シロウオ	流し網
広島県呉市安浦町	野呂川・中畑川	シロウオ	梁
広島県安芸津町三津	三津大川	シロウオ	梁
山口県萩市	松本川・阿武川	シロウオ	四手網
山口県豊北町	栗野川	シロウオ	梁
山口県岩国市	今津川・門前川・錦川	シロウオ	四手網
山口県防府市	佐波川	シロウオ	袋網
福岡県福岡市	室見川	シロウオ	梁
佐賀県唐津市浜玉町	玉島川	シロウオ	梁
長崎県佐世保市佐々町	佐々川	シロウオ	四手網
大分県佐伯市	番匠川	シロウオ	梁
熊本県天草市新和町	大宮地川	シロウオ	四手網

その川石による装置自体も「ザワ」と呼ばれ、正月3ガ日過ぎには「場所取り」の杭を打つ。場所も代々伝えられ、同じようなところに建てる。この場所は河口から1kmほどの西光寺までのあいだの、川の上流か下流に建てるが、オオシオのときは奥が有利で、コシオが一番前がいい。漁のはじまりは河口が有利で、最後の時期は奥が有利ともいわれ、結果的には、それぞれの一漁期の漁獲量はほぼ同量であるという。「シオマカセ、運のツキマカセの漁」だったからである。また、魚を受け止めるカゴの数も漁獲量の過多に関係しないという。カゴを洗ったりするような管理に時間がかかるので、一軒で平均3～4個くらいであるという。成立当初は12～13軒の、兩岸の川のそばに住んでいた人たちが漁に携わっていたが、震災後の現在は半分の6軒になってしまった。仮設住宅に住んでいる人もあり、川に下りてくることもなくなったからである。伊里前川のような2級河川の場合、漁業権が獲得できず、漁業組合ができないこともあり、細々と楽しみながら、かつ実益も得ながらの生業であった。それでも、シロウオ漁の復興は迅速であった。

ザワを作るには春の漁期が始まるときに誘い合って作るが、このことを「イソを立てる」といい、2～3日はかかった。漁期終了後も石をそのままにしておき、ときには、大雨で流れてきた石を集めておいたりもする。石の高さは35～40cmと制限され、川の両端も40～100cm（川幅の1割）を開けておくという。ザワ自体も石組みの間から水が流れていなければならず、ダムのように水が静止していると、シロウオが近づいてもそこから動かなくなる。流れにも勾配を付けておくというから、


写真3 シロウオ漁の「ザワ」  
(伊里前川、2010.6.13)



ザワの造り方は意外と難しい（写真3）。伊里前の渡辺千之さん（昭和23年生まれ）によると、震災後、95歳になる母親が、亡くなる1週間ほど前に、渡辺さんが川でザワを作っているところへ来て、「こんでは魚捕れませんよ」と語って助言を与えていったという。彼女も以前はシロウオ漁の漁師であった。<sup>(3)</sup>

カゴの大きさは、横幅が40cmで、奥行きが60cm、ネットに誘われて入ってしまうと抜け出せない仕組みになっている（写真4）。この「銚子の口」とも呼ばれるところは、「魚の乗せ」と言って、少し斜めになっていて、シロウオが上ってから下りる仕掛けになっている。このカゴは気仙沼（宮城県）の人から教えられたというが、構造的には、海の大網（定置網）に近く、この小さな応用から始められた可能性も高い。以前は、先に述べたように、ザルを入れておいたが、8番線の針金で小さな定置網を考案されてから、魚が倍に入ったという。

また、以前は川の丸い石は苔が付くために魚が寄り、この川の石しか使わないという取り決めがあった。しかし、震災後に川が荒れたので、始めて川の清掃を行なうことになり、新しく石も入れた。この川の清掃に尽力してくれたのは、ボランティアの団体であった。震災翌年の2012年には、バス2台で200人くらいが東京からやって来て、川を清掃してくれたという。今でも、シロウオの季節が来ると、80人くらいが川の清掃に来ている。

漁期は4月1日から6月30日までとされているが、桜が1本でも咲けばシロウオが産卵に海から川へ上がってくるという自然暦も伝えられている。かつては伊里前川の川沿いに桜並木があって、漁期には桜の花を眺めながらの、のどかな漁であったという。シロウオがカゴに入るのを見ていれば良いだけの作業だからである。川のアオノリが抜け出す季節が来ると取れなくなるともいわれるが、シロウオは夏季に砂利に潜って産卵するので、産卵前に捕ることが秘訣である。自分たちのオカズ程度にしか捕れなくなったら、自然と止めるともいう。

漁の時間は、海からの上げシオのときの30分くらいであり、石をシオが越え始めたら止める。オオシオの3～4日くらい、ナカシオの3～4日くらいが漁に恵まれ、コシオ3～4日くらいはあまり漁がないという。また、シオと風（南風）が同じ方向に吹くときにザワに入るともいわれる。実際の漁ができるのは、3カ月の漁期のうち1カ月半くらいである。川の水は温かいほうがよく、砂利が温まっていく順序は伊里前川の漁場では、右岸→左岸→中央の順番だという。

シロウオが大漁のときは、1日平均3パックは捕れる。生簀に活かしておき、翌日に死仔<sup>しにこ</sup>を選んでからパックに入れる。1パックは300g、1匹1gなので、1パックに300～320匹は入っている。1漁期の収入は、多い人で20～30万円。以前は、内陸の迫町（宮城県登米市）まで売りに行ったが、当初は300gで1,000円、最近は半額くらいになった。迫町では天ぷらやオスイに入れて食べている。シロウオは目をおとすと体が白くなるが、透明のほうが高く売れ、泡が多くても安くなるという。産卵が近くなると、からだ太くなり、赤や黄色に変化してくるという。現在は、地元のホテルにも卸し、ホテルでは「シロウオの踊り食い」と称して、ワイングラスに5～6匹を入れて500円で宿泊客に売っている。

このシロウオ漁は震災の翌年に再開したが、それはシロウオ自体が川にやって来たのを発見したからだという。伊里前の千葉正海さん（昭和30年生まれ）によると、シロウオが翌年に来たときには「災難を乗り越えて、

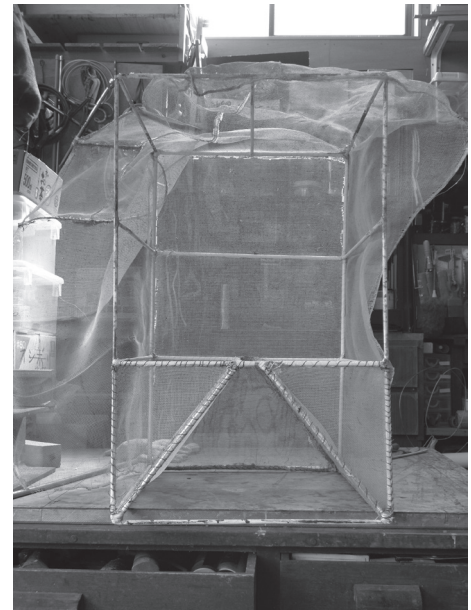


写真4 定置網から伝えられたカゴ  
（上から見たところ）

よくこの川に帰ってきたな」という感じだったという。前年に産卵した卵が大津波に流されずに残っていたからである。彼はこのシロウオ漁は「食えるためでもなく、売れるためでもなく、これ自体が生きる喜び」であると語る。このシロウオ漁を再開するときには、「防潮堤や道路などのインフラ中心の復興（「近代復興」）とどちらが大切か、おまえたちがそんなことをやっているから復興が遅れるんだ」と、周囲から責められたことが多かったというが、それでもシロウオが伊里前川に来るかぎり、漁を続けることができている。「この川に、この地に生かされていると感じている」と、正海さんは語っている。前述した渡辺千之さん<sup>(4)</sup>も、「自然のままにしておくと、復活する」、「自然を残しておけば、必ずいつかは何かいいことがある」と語っている。

### 3. 籤で決める漁場

次に、四手網を用いるシロウオ漁の方を捉えておきたい。和歌山県はヤグラから四手網を下ろすシロウオ漁が盛んである。現在は湯浅町の広川が有名になったが、以前は、由良（由良町）、古座（串本町）、森浦（太地町）、浦神（那智勝浦町）、宇久井（那智勝浦町）などの各河川においても、盛んに行なわれていた。

そのなかでも、那智勝浦町下里を流れる太田川のシロウオの四手網漁は、以前は和歌山県のほかの川と同様にヤグラを立てて四手網を吊るして捕っていたが、平成10年（1998）を過ぎたころから、川に杭を立て、船を固定してから四手網を用いる方法に変えた。その理由は、後述するように、その日の漁が始まる時にだけ籤を引いて漁場を決めるが、日中に移動することが許されていること、また、実際に船を用いるほうが、漁獲量が増えたこともある。ただ、一斉にヤグラから船へと変わったわけではなく、並存状態も続き、その場合でも籤は平等に引いた。

四手網の大きさは、255cm 四方の外枠の網の中央に、125センチ四方の目のこまい網（実際の捕獲部分）を縫い合わせた網である。熊野灘の海から太田川へシロウオが遡ってきたときをねらって、船から吊るしておき、この網の上を通過するときに引き上げて捕る漁である。以前は、子どもがカヤを川に挿し込むような漁法でも2合くらいは捕れたものだという。

漁期は1月10日ごろから4月中ごろまで。ヤマザクラが咲く季節が最盛期で、河口の天満に咲くソメイヨシノの開花を指標とした。終了期の目安は、梨の花が咲くころだという。

シロウオ漁の漁場は、河口から下里大橋までの約1kmの、川幅も150mほどの狭い漁場である（写真5）。船ではなく、ヤグラをかけて固定していた時代には、橋の上まで漁場としていた。実際に、吊り橋のある「曲がり淵」まで、シロウオが産卵に遡上してきたからである。

漁業者のほうは、多いときで40人もいたときがあり、船と船のあいだが「船丈」（船幅）しかなかったという。そのために、午前と午後とに分かれて操業したこともあった。このような多人数になると、ポイント（漁場）を籤で引いて決めるしかなかったわけだが、現在2～3名の操業者になっても、自分が狙っている漁場を得たいがために籤を引いている。しかし、中途での移動は自由であるが、当初の場所に戻ってはいけないという暗黙の取り決めがある（後述するように平成8年〔1996〕の組合総会においては「移動禁止」となった）。この下里では、操業できる日に毎回、籤で漁場を決めたが、籤の数字と漁場とを照合させる方法ではない。いわば、1番籤を引いたものから順に、漁場選定の優先権を与えられ、自身にとって適切と思われる漁場を選んで、1日中、その場所を根城にする権利を得るための籤である。図1の数字は、その地名の箇所に数字の数だけの漁場があるということを指している。図中で一番にシロウオが捕れるところは、今でもヨシの生えているエガワの1番から7番の漁場である。

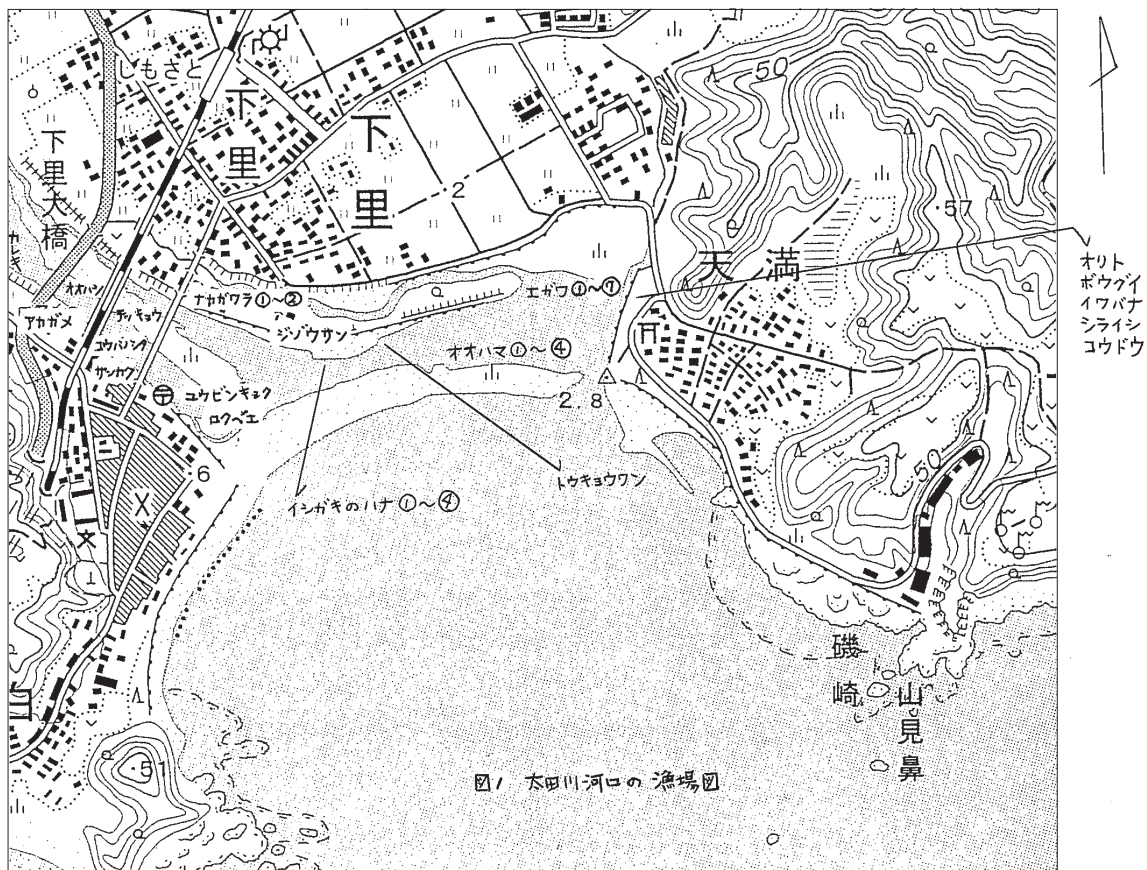


図1 太田川河口の漁場図

河口から下里大橋までを漁場とする「下里白魚漁組合<sup>(5)</sup>」では、昭和60年(1985)に作られた、座簀と本簀の二つの簀箱を所有している(写真6)。モウソウダケの断面を6角にした六角柱の簀箱で、座簀のほうが高さ25センチ、6角形の幅が9cm、本簀のほうが高さ27cm、幅が12cmである。簀自体も竹製で、先端の一方は尖らせて黒い色を塗り、もう一方の先端に漢数字が墨で記されている。

簀は当日の操業前に行われるが、予定時間に5分ほど待ってから遅れてきた者に対しては、最後の場所を宛がわれる。下里では、このときの簀の引き方にも特徴がある。

まず、漁業者が円陣を組み、全員に六角柱の簀箱を順番に振ってもらう。次に、円陣には当初から、前回に最後の座簀(簀のなかで1番数が多い)を引いた者と、最後から2番目の座簀を引いた者とが円陣のなかで並んで立たせておくが、彼らが順番に座簀を引いてから数字を照らし合わせ、少ない数字を引いた者から順に、隣の簀を引いていない者へ向かって、円陣を回っていく。座簀の後の本簀も同様に、前回に本簀を最後に引いた者と後ろから2番目の者を並んで立たせて、同様のことを行なう(図2)。本簀の最後の簀を2日続けて引く人がいる場合、そのような者に対しては3日目の本簀を最初に引かせるという異例の処置もある<sup>(6)</sup>。以上のように複雑な取り決めをしなければ、漁場の機会均等性は、はかられなかったのかもしれない。



写真5 太田川の河口。右側がシロウオ漁の漁場。  
左側は熊野灘(2016.3.8)



全国的にみて、簀で決める漁場は、比較的漁業の道具立ての少ない、それゆえに熟練の技術の積み重ねが必要な漁業に多い。小型漁業の典型でもあるが、漁場も目の前にあり、参加しやすい漁業であるだけに、漁場が限られてくる。それゆえに、簀による漁場の選択がはかられ、その平等性を支えてきたのである。それでは次に、シロウオ漁の道具立てと、実際の操業の様子を捉えておきたい。

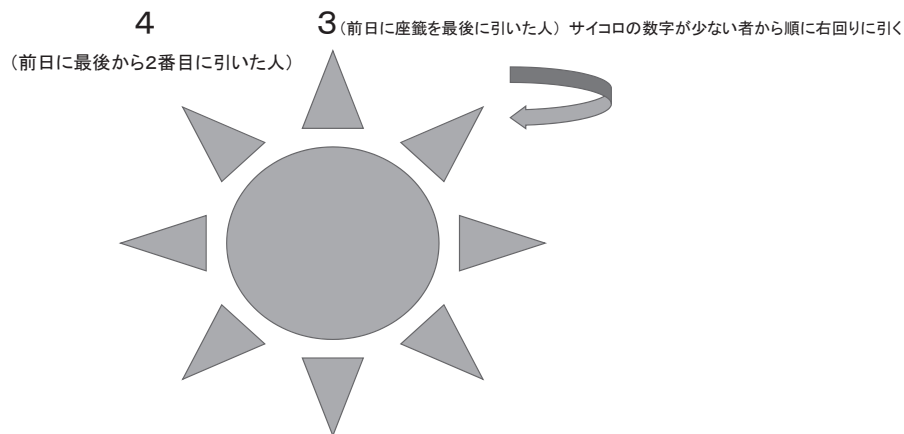


図2 座簀の順番（仮に「3」の目と「4」の目を引いた場合、少ない目を引いた者から右回りに円陣を回って引く）

#### 4. 太田川のシロウオ漁

シロウオ漁は、1月10日ごろから4月中ごろまでの短い漁期であるが、1日のうちでも、その漁に係わる機会も短い。主に、旧暦10日から22～23日までのオオシオ（潮の干満差が大きい）の期間で、満潮時の2回である。「10日ジオ」は午前8時が1回目の満潮、それが毎日1時間ずつ誤差を生じて遅れていく。シロウオが河口から入ってくるのは満潮前のコミシオ（アゲシオ）のときである。コミシオに対して、引く潮のことをクダリジオ、あるいはサゲシオと呼ぶ。ミチと呼ばれる、シロウオが遡上する動線は、岸沿いであり、瀬の上方を移動する。風向きによって違い、シロウオは風上に向かうように上ってくるという。理想的な漁場は、河口で水深4～5m、浅いところで水深が60～70cmの浅いところで、深場ではシロウオは川底を移動するので、勘を必要とする。

それでは、操業の順序に沿いながら、各漁具の説明をしておきたいと思う。まず、船はテンマと呼ばれ、板子5枚の小さな磯船である。船外機をミヨシの右舷に付けているのが異例であるが、トモでの作業を広く取ることが理由である。その船を太田川に出してから、簀で決め



写真6 六角柱の本簀（左側）と座簀



写真7 ビニールパイプの杭を打って、船を固定させる（2017.3.5）

られた漁場に行き、船のオモテとトモに杭を打って、船を固定させる。以前は木杭を小槌でたたいて立てたが、現在はプラスチックパイプを海底に挿して、船を固定している（写真7）。船の立て方はトモを上流に、オモテは少し斜めに45度くらいにして岸に向けるようにする。シロウオは岸に沿って遡上するが、シロウオの向きに直接に船のオモテが向き合うようだと、魚がオジル（怖気つく）ので、想定される群れの向きに対して、多少斜めに船を固定するわけである。船に当たって曲がってくる群れと、直接に遡上してくる群れと両方捕れるからである。シロウオは川を上がるにしたがって敏くなるというが、入ってくるコミシオが多くなると水も濁り、シロウオが怖気づかずに、どんどん入ってくる場合もある。雨で増水した翌日の温い日に、シロウオがよく川へ入ってきたものだともいう。

また、船の固定までは船外機で移動するが、シロウオ漁が始まってからの操船は竹竿で移動する。以前は同じ船で、船外機をトモに付け替えてイカなどの磯釣りもしていたという。下里では、海で磯漁をしていたということが、シロウオ漁がヤグラから船の四手網へと変えることができた大きな要因であったと思われる。

次に「メ（目）」と呼ばれる漁具を、船のトモから投入する。「メ」とは、川底に白色の物を置き、その上をシロウオが通る影を映してくれるものである。以前は白いカキガラ（牡蠣殻）の白い腹の部分をつないで用いたが、現在は白いプラスチック製の小板を菱形に切って、つないでいる。カキガラを用いたころは、那智勝浦港の外側の天然ガキを用いた。大きい貝殻であることが重宝された。メの形は漁業者によって相違するが、下里在住の下地収さん（昭和16年生まれ）によると、丸形や四角形はなぜだか駄目だという。それを15個ぐらいつないだものを多くて5本、トモから垂れ下げておく（写真8）。ちなみに、天草の大宮地川のシロウオ漁では、白いタン板を先に敷いて用いている。



写真8 メをトモから投げ入れる。

次に、船から群れが見えるあたりに、油を浸み込ませたタオルをねじったものを先に付けた竹を挿し出し、そこから油を少しずつ落としておく（写真9）。これは、水面に油膜を生じさせて、川底をよく見えるようにする仕掛けで、風波が立っているときに効果を発揮した。風波で水面が見づらくなり、同時に風によってタオルが揺れて油がしたたるからである。その布キレは、いつもは油を入れたタッパーに入れて船に置いておく。油は、以前は、近隣の太地で捕れたゴンドウクジラの脂などを用いたが、天ぶらなどを揚げた後の、使い古しの油のほうが、落ち具合がよいという<sup>(7)</sup>。



写真9 油を落とす

それから四手網を入れ、自分の影が海面に映らないように、船に座って、ひたすらシロウオのナムラ（群れ）を待つ（写真10）。四手網の網目は、外側の粗い部分は自分で結い、細かい部分は田辺（和歌山県）の方から購入している。中の細かい目の網のほうは綿製で、網を上げたときに自然に底に向かって沈んで魚が逃げないように工夫もされている。



シロウオが網に近づき始めると、「追い棒」と呼ばれる竹竿を持って、群れの後ろから静かに追い込んで、網へ向かって誘導を始める。追い棒の先には分銅（チギとも言う）が付けられているが、その分銅を静かに水中に下ろし、川底の石に音を立てて上手に追い込む（写真11）<sup>(8)</sup>。以前は分銅ではなく、チギバカリの一部を用いたが、鉛はよくなかったという。また、船のトモの板子を足でドンドンとたたき、網の上を通り過ぎようとするナムラ（群れ）を、網に戻すような技術も必要である。シロウオが網の上を通ったときに、急いで網を上げ、網底に溜まった魚を柄杓ですくう。柄杓は5合くらい入るものである。欲を出して、シロウオが網に溜まるまで待ってから上げると、逆にまとまって逃げられることも多かったという（写真12・13）。

このような操業をくり返し続けるが、多いときには1日の網上げで1升くらいは捕れていたという。多いときで6升くらい上げるときもあった。1度網を上げると、ヌタが網に付着するので2度目からは、網が浮いてしまってシロウオが網の両脇を抜けて逃げてしまうことも多い。そのために、網上げの上手な人は、上流の方へ網を一度流すことでヌタも洗い流すという。

捕ったシロウオは、まず自家用として食べる。シロウオにはヌタが付いているので、塩をかけて何度も洗い落とし、その後、醤油をオタマ1つぐらい、少しずつ入れながら煮て作る。自家用のほかには、那智勝浦や新宮の得意先の旅館に売りに行った。旅館では客に踊り食いとしてシロウオを出した。また以前は、兵庫県の姫路から、メバル釣り用の餌として買い付けに来る人もいた。1月のころのシロウオは小さくて美味しいが、3月になると体長が大きくなり、味も緩慢になるという。シロウオを炊いた煮つけは、1合1,500円で買ってもらった。



写真10 四手網を下ろす



写真11 追い棒の先の分銅を下ろす



写真12 網を引き上げる



写真13 柄杓でシロウオをすくう

このシロウオの価格を決定するのは、「下里白魚組合」の毎年の漁期始めに開かれる総会のときである。次に、この太田川の「下里白魚組合」のことにも触れておきたい。

## 5. 「下里白魚組合」の役割

太田川のシロウオ漁は、前述したように、以前は船を持っていない者がヤグラを川岸からせり出して四手網で捕獲していた。それが、以前から海の漁をしていた者たちが船を用いてシロウオ漁に介入し始めると、他の者たちも、そのためだけの船を持ち、あるいはヤグラを用いた漁自体を止めていったという経緯がある。

ヤグラではなく、船が中心となってき

たそのころから「白魚組合」ができたというのが、昭和50年年度（1975～76）から平成19年度（2017～18）までの42年の簡単な記録が、「白魚組合 会計帳」というB5判のノートとして、同組合に遺されている。そのノートから、毎年の漁業者数を拾い上げ、その変遷をみたのが表2である。一覧して平成に入ってから（1989年～）、少しずつ減っていることが分かるが、現在は3人である。

「白魚組合 会計帳」からは、組合員による共同作業の出欠簿が記されており、その作業の内容が伺われる。たとえば、昭和53年（1978）には、1月4日に「小屋こしらえ」、3月24日に「小屋こわし」が行なわれている。この間がシロウオ漁の漁期であったことが分かるが、この漁期のあいだ、川の側に小屋を建て、ここで籤引きや、休憩や暖をとっていたようである。同年の収支の科目には、灯油が漁期間中に合計で36ℓを使用している。

また、昭和57年（1982）の3月15日には、吉野桜の苗40本を1万円で購入し、2日後に、組合員16名で植えている。伊藤守孝さん（昭和14年生まれ）によると、これはシロウオ漁を見に来る観光客のために植えたものだという。シロウオ漁と桜の開花時期とが重なっているからである。翌58年（1983）の7月4日と9月23日には、「桜下刈」を共同作業としており、その後、この作業は62年（1987）まで続いている。昭和59年度（1984～85）の行事をみると、8月5日が桜下刈、10月29日が薪寄せ、11月9日が小屋移転、2月13日が薪わり、2月23日が桜下刈と、年に2度、下刈を行なっている。薪は灯油と同様に、小屋の燃料であり、流木を集めておいたりしたともいう。

毎年1月の漁期前には総会が開かれているが、いつも議題に上がるのは、シロウオの販売価格であり、組合内の下里と天満の漁業者が協議により決めており、前述したように、1合1,500円がこの記録に残された42年間、改められていないようである。

総会では、さまざまな些少なことも取り決められている。たとえば、58年（1983）の総会では、「くじ引に遅刻した者は最終番号とする」、「各種行事には必ず出席する事、出席出来ない時は、代理人が出席する。代理人も出席出来ない場合は、500円納入の事」などが決められている。平成8年度（1996～1997）の総会においては、重要な決議事項があった。籤を引いてから、各自が名乗った場所に位置するが、以前はその場所から

表2 シロウオ漁の漁業者数の変遷

年度（西暦）	人数	年度（西暦）	人数	年度（西暦）	人数
昭和 51 (1976)	21 人	平成 1 (1989)	13 人	平成 11 (1999)	不明
52 (1977)	18 人	2 (1990)	12 人	12 (2000)	6 人
53 (1978)	24 人	3 (1991)	12 人	13 (2001)	4 人
54 (1979)	24 人	4 (1992)	12 人	14 (2002)	3 人
55 (1980)	24 人	5 (1993)	11 人	15 (2003)	3 人
56 (1981)	20 人	6 (1994)	11 人	16 (2004)	2 人
57 (1982)	不明	7 (1995)	10 人	17 (2005)	5 人
58 (1983)	22 人	8 (1996)	10 人	18 (2006)	6 人
59 (1984)	22 人	9 (1997)	9 人	19 (2007)	7 人
60 (1985)	23 人	10 (1998)	8 人		
61 (1986)	22 人				
62 (1987)	18 人				
63 (1988)	不明				

変更して移動することも可能としていた。しかし、この総会において、それを禁止するかどうかが問われたのである。その結果は、無記名投票で禁止すべきが5票、反対が4票で、移動は禁止となった。ただし、現在は3名なので、その限りではなくなった。

また、河川工事の業者が川を濁らせたときにも、その業者に通告をし、不漁などの被害があった場合には補償を求めている。たとえば、平成元年（1989）には、建設省から50万円の協力金を、平成6年（1994）には〇〇組から「にごり迷惑料」として36万円を配布されている。

## おわりに

これまで、主に和歌山県の太田川のシロウオ漁について、それに関わる生活の様子を叙述してきた。ここで再度、汽水域の漁業として、その生活をまとめておきたい。

まず、基本的にシロウオ漁は、春先のシオと共に海辺から河川へ向かって産卵に遡上するシロウオをねらって捕るものであるから、漁場そのものが汽水域である。各地の河川のシロウオ漁の状況をみても、満潮時の約2時間前後が入漁の好機となる。そして、季節を限って陸に到来する魚であるかぎり、根底において「寄り物漁」でもある<sup>(9)</sup>。寄り物である魚は時を遅えず必ず人間の元へやってくるという「規則性」のもとで、しかし多い年もあれば少ない年もあるという「偶然性」、さらに漁業者個人の技量と運による「偶然性」ということを楽しみとして続けられてきた漁である。「規則性」と「偶然性」のはざまで、その情熱をかきたてられてきた漁であるといってもよい。

「寄り物」であるからには、その平等性も徹底していて、「下里白魚漁組合」が作られ、漁業者が多かった時代においては、その漁場は、毎日の複雑な慣例による籤を引いて決定された。「籤」とは、衆目監視のなかで公然と行なわれる「なわばり」<sup>(10)</sup>の決定法でもある。

また、四手網を用いるという小規模な漁であっても、そこには、水面に油を落として水底を見る技法や、「追い棒」などによる追込み漁の技術など、さまざまな漁の伝統が流れ込んでいることも特異な点である。それは、一方の宮城県南三陸町歌津の伊里前川において、石による一種の築を作り、シロウオを受ける籠が定置網からヒントを得たと伝えられていることと併せて考えてもよい。一見して単純に見える漁法ほど、そこには多くの先人の漁師たちが工夫をこらした知恵が凝縮して伝えられているからである。

さらに、「下里白魚組合」で、シロウオ漁を見に来る観光客のために桜の苗木を買い、下草を刈って育てている点も興味深い。彼らが行なっているシロウオ漁は、経済性を伴いながらも「楽しみ」の漁であり、その同じ余裕は「見せる」漁としても意識化されていたと思われる。

海からの「寄り物」は、浜辺に打ち上がるものだけを指すわけではない。とくに、それが魚である場合、「寄り魚」を捕る場所は、河川域などの汽水域は、典型的な漁場となる。海からの魚を育て、「楽しみ」としての生業を成立させるのも、同じ汽水域である。

しかし、この汽水域は、自然災害や人工的な河川改修や埋め立てなどによって、環境破壊に対して脆弱な生態域であることも間違いない。それが、かろうじて保存されている理由は、シロウオ漁などを典型とする人間と汽水域との直接的な関わり合いを育んできた小規模漁業の営みに起因することだけは、本稿で叙述してきた生活誌を通して明らかになったように思われる。



【注】

- (1) 鶴見良行『マングロープの沼地で』（朝日新聞社、1994）18p
- (2) 2017 年 9 月 1 日、熊本県天草市新和町大宮地の本多一澄さん（昭和 21 年生まれ）より聞書。
- (3) 2016 年 6 月 30 日、宮城県南三陸町歌津伊里前の渡辺千之さん（昭和 23 年生まれ）より聞書。
- (4) 2016 年 6 月 4 日、同年 8 月 4 日、宮城県南三陸町歌津伊里前の千葉正海さん（昭和 30 年生まれ）より聞書。
- (5) 下里大橋から上の漁場は「太田川漁業組合」が管理をしていて、主にアユ中心の捕獲をしている。
- (6) 2016 年 3 月 7 日、和歌山県那智勝浦町下里の下地収さん（昭和 16 年生まれ）、伊藤守孝さん（昭和 14 年生まれ）より聞書。なお、以下の記述の大半も、2 名の方々からの聞書による。実際の操業の様子を拝見したのは、2017 年 3 月 25 日である。
- (7) 三陸地方の磯漁においても、カガミ（箱メガネ）が使われる以前は、海面にボウスリという道具で椿油を振ることによってナギにして海底を見た。これをナギミ、あるいはナギフリミとも呼ばれる。しかし、椿油は高価なので魚油を用いることが一般的になり、魚油はイワシ・マンボウ・サメの臓腑を煮つめてから煎じて作った。また、沖縄県の伊良部島（宮古島市）の佐良浜の追込み漁の漁師は、ミーカガン（水眼鏡）が普及する前には、口の中に豚の脂を含んでから潜り、その脂を少しずつ吹き出しながら海底に油膜を作ることによって魚を探したという。
- (8) 下里では「追い棒」は、木ではなく、竹であるが、近隣の串本町津荷のアオリイカの磯打ち網漁においては、海面を打って追い込む棒のことを「追太棒」と呼んでいる。
- (9) 「寄り物漁」として、沖縄本島地方のスク漁を扱った論文として、高崎優子「自然を楽しむ作法—沖縄県における寄り物漁を事例として—」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』第 13 号（北海道大学、2013）583p-603p などがある。
- (10) 秋道智彌『なわばりの文化史 海・山・川の資源と民俗社会』（小学館ライブラリー 123、1999 [初版は 1995]）103p